

## 婚姻に至る経歴書

申請人 DXXXXXEN WXXXNA

作成者・夫 山田 新助

### 1 妻の婚姻・在留歴

現在、私の妻となった DXXXXXEN WXXXNA (以下「妻」と書きます)は、前夫のKK 晴一氏(以下「KK 氏」と書きます)と2002年7月 日に婚姻しました。しかし、タイの実父は既に現役仕事を引退しており、実母が病気がちだったため、妻がアユタヤ市にあるキャノンの工場で働き、家計の担い手になっていました。そこで、妻がすぐに仕事を辞めて来日するわけにはゆかないということで、KK 氏と合意しており、ときどきKK 氏がタイへ渡航していたと聞いています。なお、妻がキャノンで働いていたとき、タイ人の上司が日本に留学経験があったことから日本語は堪能で、その上司から妻を含めた数人が日本語を習っていました。妻とKK 氏も日本語で会話していたそうです。

妻は、KK 氏の強い希望があり、2008年12月 日からKK 氏の妻として、日本人の配偶者等の資格で日本に在留することになりました。KK 氏と妻の居住地は、埼玉県越谷市 ×町で、最寄駅は東武伊勢崎線の ×駅でした。妻の長姉である HXXXI EK-XXXG は、永住者として日本に在留しており、居住地は埼玉県草加市 ×団地で、最寄駅は同じ東武伊勢崎線の ×団地駅です。 ×駅と ×団地駅の間は2駅と近く、妻と姉は、何くれとなく行き来していました。姉 EK-XXXG には、タイ人前夫との間の子が3人あり、そのうちSN(長男)とDP(二女)の2人が、山手線御徒町駅付近にあったタイ料理店「PG」に勤務していたので、妻も同店の顧客として(もしくは遊びに)ときどき同店を訪れていました。このように、妻と姉 EK-XXXG、その子のSNとDPは親しく交際していました(ご参考に、**写真6**)。

### 2 私と妻の出会い

妻が来日して数週間後ということになりますが、2008年12月2×日(土曜日)勤務を終えた私は、上記タイ料理店「PG」に顧客として入店し、そこに遊びに来ていた妻と知り合うことになりました。私のタイ通ぶりは後に記すところですが、妻から見ると、同店舗(以下「PG」と書きます)に来る人たちの中で、片言ではなく、きちんと勉強したタイ語で話し掛けて来る人は珍しかった、ということでした。私の目に映った妻は、数多く知るタイ人の中で

も特別な美形の女性として印象に残るところでした。

私はその後も頻繁に PG を訪れました。たまたま妻がそこに来ていて会えたときは決まって話をするようになりました。会えないときは SN か DP を通じて電話で話をしたこともあり、やがて妻と電話番号を交換して直接電話で話をすることもありました。こうして私は PG の常連客になり、当時口髭を生やしていたので “pii nuad” (日本語で “ひげさん”) と呼ばれていました。それが、後述するとおり、妻だけ私に対する呼び名を変えることになります。

### 3 妻の身の上について

こうして、妻と PG で会ったり電話で話をしたりするうち、妻は私に信頼を寄せるようになってきたのでしょう。翌 09 年 2 月から、いろいろ身の上ばなしを聞くようになりました。妻の話を総合しますと、妻は既に日本人と結婚していること。夫の K K 氏は金属加工関係の会社を経営していたが急な不況で経営不振に陥ったこと。やがて会社は倒産したが、K K 氏は次の仕事を探すでもなくブラブラしているので何か良い仕事はないだろうか？仕事を紹介して欲しい。K K 氏がタイへ移住したほうが生活費が安くて済むと言い出し、大喧嘩になったこと。そんな話でした。

このうち、妻が既婚者であることは私にとって大変ショックでしたが、私を頼って相談に乗ってもらいたいという妻の気持ちをいじらしく感じるころでした。

そして、妻としては、K K 氏がタイへ移住したいと言い出したことが大問題のようでした。それというのも、前述のとおり妻がアユタヤのキャノンで働いて生計を担っていたのに、K K 氏の強い希望でキャノン辞めて来日したら、間もなくタイへの移住を言い出され、自分の人生を翻弄されるようで我慢がならなかったと言います。

K K 氏が働かないため日本での生活を維持しようと、妻はやがて PG で働くことを決心することになります。「PG なら、行きつけだから慣れてるし、日本語の上手い甥姪の SN と DP の勤務先でもあるので、交通手段を良く知らない日本でも一緒に通勤できる。今は自分が頑張って、夫の分の生活費も稼がなければならない」と考えたそうです。妻としては、K K 氏との結婚後、何年も来日しなかったことを、K K 氏への負い目に感じていたのです。

それでも、相変わらず K K 氏は働かず、夫婦の心は離れて行きました。姉 EK-XXXG にも度々相談に乗ってもらっていたのですが、「今は我慢するしかない」と諭されたのだそうです。夫婦の心は冷え、家庭内別居のような形になって行きました。

やがて来日後 11ヶ月が経過し、在留期間更新の時期を迎えるわけですが、KK 氏と妻が、この先も日本で夫婦として生活して行くのかどうか。いわばそれを熟慮するための期間として、更新をお願いしたというのが妻の本心だったそうです。夫をポンと投げ出し、タイへ帰国してしまう選択肢もあったのでしようけれど、根が真面目なのか、姉の説得とKK 氏を何年も日本で待たせたという気持ちから、すぐに夫から離れる気にはなれなかったようです。

#### 4 私の履歴とタイとの関わりについて

私は、現在、2つの医療機関において、理学療法士として勤務しています。ほかに、「はり師」「きゅう師」の資格も持っておりますので、免許証の写しを提出します。

私はもともと東洋医学に興味があり、大学生のときに中国に1年間留学した経験があります。その後も、鍼灸、気功などにも興味があり、度々訪中していました。2003年には初めてタイへ渡航しました。タイ語を聞いてみると、発音や喋り方が中国語と似ているなど思ったのが、タイに興味を持ち始めたきっかけでした。そして何よりタイの音楽に興味を持ち、すっかり虜になってしまいました。タイ初渡航から帰国すると、早速、当時、千代田区神田×町にあった「タイ×ランゲージ」というタイ語学校に通学を始め、そこで4年間、タイ語の会話や読み書きを履修しました。ですから、タイ人とタイ語で話をするには困りません。妻との会話も、普通は70%くらいは日本語で、30%くらいはタイ語を使っています。タイの家族のことや結婚・入管の手続などは、タイ語で話したほうが理解が早いところもあります。

03年のタイ初渡航以来、パスポートを点検すると、タイ渡航歴は全部で28回を数えます。同年以降、タイ料理店などに頻繁に出入りしてタイ人と話をするようになり、タイの文化、特に音楽や寺院などへの興味が益々沸いてきました。そういう中で、妻との出会いに至ったわけです。

#### 5 私と妻の交際

会社が倒産して働こうとしないKK 氏と妻の冷えた関係、そして妻のKK 氏に対する義理立て。一方で、身の上ばなしを聞きながら、頼られる関係になって行った私と妻の関係。妻も相当悩んだのでしようけれど、妻の気持ちは段々と私に傾いてきたようでした。

質問書6葉目にある、妻と知り合った以降のタイ渡航歴についてですが、1回目の09年4月の渡航では、タイの有名な祭り「ソンクラーン」を観光

しに出掛けたものです。

2回目の09年10月の渡航は、同年9月下旬から一時帰国していた妻に案内してもらって、×県××郡の妻の実家を訪ね、父母や兄・次姉ら親族に会っております。このとき、私は、タイの父母や親族らの前で、「もし妻が離婚するようなことになった場合は、ぜひ私と結婚して欲しい」とタイ語で口に出してしまいました。私の本心は、確かに「すぐにでも結婚したい」という意思だったのですが、このときの妻は、KK氏との関係を清算するかどうか決心しかねていたはずです。妻の意思も確認せず親族の前で話をしてしまったのは、思慮の足りない一方的な発言だったか？嫌われてしまわないか、と思ったものです。

ですが、私のこの言動で、妻は吹っ切れたのかもかもしれません。日本帰国後の09年12月5日(タイ国王誕生日)土曜日で早めに仕事を終えた私は、妻とPGで会いました。この日はタイの吉日だという意識もあり、私は妻に「僕と一緒に頑張っていけないか」と告げました。妻は「それが一番嬉しい」と答えてくれました。これで、お互いに将来の結婚を約束したという意識を持つようになりまし。妻は、私と人生を歩む決心を付けてくれたのです。それ以降、KK氏と妻は、夫婦とは名のみの関係になり、あとはKK氏に、どう離婚を切り出すか、そのタイミングはいつが良いかを計ることになりました。当時を写真で振り返ると、私と妻は、09年12月以降、都内近郊でデートを重ねるようになっていました(写真1,2,3,7,11,12)。

私が妻と知り合ってから3回目のタイ訪問は、同年2月×日から2×日まででした。このときは、行き来とも妻と同行しました。私と妻の共通の友人が結婚式を挙げたので、それに参列するために渡航したものです。

## 6 妻の離婚と私との再婚

こうして、09年2月以降、ぎくしゃくし始まったKK氏と妻の関係は、2010年4月 日、協議離婚という形で結末を迎えました。私と妻の同年2月のタイ渡航とは別に、KK氏も同じ2月に、2ヶ月の予定でタイへ渡航することになり、それとの関係で離婚届を出す日が決まりました。

妻は、離婚同日に同居人という立場になり、追って同年6月××日に私のマンションに転居してきて、私との同居生活がスタートしました。このように、妻が離婚後も日本に滞在し続けたのは、離婚成立の段階で、既に私との再婚を決めており、私との再婚手続をするため待婚期間の経過を待っていたのです。その間、再婚を約束した私との実質的な夫婦としての共同生活がありました。

追って、4月 日の離婚日から6ヶ月の待婚期間を経過したので、在京タイ王国大使館に婚姻要件具備証明書の発給を求め、同証明書が10月××日に郵送されてきたので、翌日付けで、都内 区役所へ婚姻届を提出しました。なお、同大使館は仮移転中のため事務処理が遅くなっており、証明書関係は申請して1週間後の郵送が多くなっています。

また、タイ側の婚姻報告については、同月2×日に同大使館へ婚姻及び改姓証明書類の申請を行い、11月 日に関係書類の送付を受けたので、早速タイ現地に送付し、代理人により、11月×日付けで妻の住居登録地である ×県××郡登録事務所にて続柄登録(婚姻証明書)が作成されました。また、同時に、妻は私との婚姻により本国において山田姓に変更されております。本来ですと、早速、妻の旅券を山田姓に変更すべきですが、妻の在留期限が2010年12月 日に迫っていること、及び在京タイ王国大使館にて旅券の申請をすると1ヶ月程度の時間を要することから、実家姓のまま DXXXXXEN WXXXNA の氏名にて、本申請することにしました。

## 7 私たち夫婦の日常

私たち夫婦は、婚姻届からの期間は短いですが、08年12月の出会い、09年2月以降の身の上ばなしから交際開始、また、2010年6月××日以降の同居生活を経て、相互に理解を深めてきております。

上記のように私は09年10月に妻の実家で一方的な結婚宣言をしたのですが、それから日本に戻って以降、妻は私のことを「しんちゃん」と呼ぶようになりました。「しんちゃん」はもちろん、私のファーストネームの“新助”から来ているわけで、そのころ以降、妻が私のことを親しい存在として意識してくれるようになったのだと思います。一方、私は妻のことを「XX」と呼んでいます。これは妻のチューレン(ニックネーム)です。私は、08年12月にPGで妻と知り合い個人的に話をするようになってから、妻のことをずっとチューレンの「XX」で呼んできました。これは、タイ人同士が親しみを込めてチューレンで呼び合う習慣に従ったものです。

上記のとおり、私はタイの食事、言語、文化に慣れ親しんでいて、タイ人と一緒に生活してゆくのに全く支障がありません。

私たち夫婦は、タイ料理店へ出かけることもありますが、基本的には自宅で食事をします。自宅でも夫婦で食べる料理の7割がタイ料理、3割が日本料理というところです。もっとも、妻のほうも、生魚や納豆など日本独特の食事も口に合うようで、日本食だけでも困らないようです。

時間のあるときは、自宅でタイ音楽のCDやDVDを鑑賞するほか、この 区

の街を夫婦でサイクリングに出たりします。まだ、自宅マンションの周囲くらいですが、段々と郊外をツーリングしたいと思っています。

私は温泉めぐりが好きなので、妻を連れて栃木県の鬼怒川温泉へ行ったことがあります(写真7)。タイ在住のタイ人はバスタブに浸かる習慣はないのですが、妻は温泉が気に入ったようなので、これから頻繁に温泉へ行こうと話しています。

09年12月中旬には、クリスマス記念として、新宿のビックカメラでK・Dブランドの時計を7万円ほどで購入し、妻にプレゼントしました。贅沢を覚えるのは良くないと思いますが、将来の結婚を約束したのですから、このくらいのプレゼントは渡しても良いかなと思ったのです。

2010年4月 日には、ジュエリー ×御徒町店でホワイトゴールドのペアの指輪を購入しました。これは、エンゲージリングとして買ったものです。これを買って指に嵌めて、鹿児島のお祖父さんに挨拶に行ったのです。鹿児島のお祖父さんについては、私の親族として後述します。

## 8 私の親族と妻

私の父・山田二郎は10年程前に他界し、近親者としては、母と弟がいます。

上記4のとおり、私は、タイとの深い関わりの中で、結婚するならタイの女性から選ぶのが当たり前のような気持ちになっていました。しかし、父亡き今、母は古風な日本女性として生きてきた感があり、タイ女性との結婚をすんなり受け入れてくれるものかどうか？不安な気持ちでもありました。

実は、数年前にもタイ人女性と結婚しようと考えたことがあります。そのときは、母がタイやタイの女性に対してかなり偏見を持っていて結婚に反対し、私も最後まで押し通すだけの勇気がありませんでした。

以降、私としては、タイ人女性と結婚する目的に限らず、とにかく私の家族、特に母にはタイを好きになってもらいたくて、何かにつけてはタイの話をし、ときにはタイ料理屋に2人で食事をしに行ったり、タイフェスティバルなどタイ関係のイベントに連れて行きました。そして、2008年2月には母の誕生日プレゼントの意味を込めて、3泊4日のバンコク旅行に連れて行きました。これが生まれて初めての母と2人だけの旅行でした。こんなことで、母も少しずつタイという国とタイ人を理解するようになってくれたのです。このような環境づくりをしたころ、今の妻が私の目の前に現れました。上記のように、09年12月5日には、私と妻の間で結婚の意思を確認しました。その数日後、母が私の自宅マンションに来たとき、「近い将来、結婚し

たいタイ人女性がいる」と伝えました。母は、正直なところ、初めは戸惑っていたようでした。しかし、私のタイに対する熱い気持ちは十分に理解していたようで、母の口をついて出た言葉は「いずれはタイ人女性と一緒になるものと思っていた」でした。私はホッとしました。その年の内に、私のマンションで、妻を母に引き合わせました。母が妻と初めて会ってから気持ちが打ち解けてくるまで、長い時間は掛かりませんでした。母と妻と一緒に写っている写真がたくさんありますが、母と妻は特に相性が良いようで、一緒に行動したり食事に行くことも多々あります（写真4, 5, 15, 20）。

亡父の父母は鹿児島出身です。そして、父の母(祖母)が内縁で一緒に暮らしていた男性が、私が「鹿児島のお祖父さん」と呼んでいる人で西郷一雄と言います。血は繋がっていなくても本当のお祖父さんと同様のお付き合いをしています。婚約の挨拶を兼ねて妻を連れ、鹿児島のお祖父さんのところへ2回遊びに行っています。1回目は2010年4月のことでした。鹿児島に着くと、まずは祖母が眠る西郷家の墓に詣で、祖母に婚約を報告しました。この鹿児島訪問で撮影したのが（写真13,14）です。2回目に鹿児島へ行ったのは、同年7月でした（写真17,18,19）。

亡父の父(祖父)は鹿児島出身ですが、祖父・父とも墓所は都内の青山墓地にあります。2010年3月には夫婦で彼岸の墓参をしました（写真8）。同年10月にも墓参をしています（写真21）。

同年5月には、母の妹の夫が病気で入院したので、私たち夫婦と母で、福島県郡山市の磐梯熱海温泉まで、見舞いに行ったこともあります（写真15,16）。

また、母と私たち夫婦、それに弟・山田三郎夫婦の計5人で食事に出ることもあります（写真9,10）。

このように、妻は、既に山田家の重要な一員になっています。

## 9 結語

私は、理学療法士などの国家資格を持ち、2つの病院を掛け持って勤務に当たっています。高齢化が進む日本社会の中で、重要な社会的役割を果たしていると思っている次第です。

妻には、今後とも私の家庭と家族を支える存在として、引き続き日本に在住して欲しいと考えております。

妻は、2010年4月 日に前夫との離婚が成立した時点で、速やかに他の在留資格への変更を申請するか、帰国するかを選択すべきだったのかと思います。しかし、上記のように、前夫との離婚成立前からの私との交際及び本年6月××日以降の実質的な夫婦としての同居生活がありましたので、日

本での在留を継続したのです。在留資格変更許可申請などの手続をしなかった点は申し訳なく存じますが、現在は、私との再婚が成立しておりますので、私の妻として、日本人の配偶者等の在留資格にて本邦在留を継続できますように、本申請をお願いすることにしました。

以上の記載内容に相違ありません。

作成者・夫 山田 新助  
(署名)

申請人 DXXXXXEN WXXXXNA  
(署名)